

か た つ む り 騒 動

齊 藤 岩 雄

I イセノナミマイマイ騒動

野も山も新緑となり、すべての生物が生き生きと発育する6月、それも月の半を過ぎるころになると、うっとうしい天気になり連日のように雨が降り続く。梅雨である。ちょうど、こんな不快指数の高い天気が続くころになると、この世をわが世とばかり喜んで、草むらをはいまわり、石垣に登り、木にすがり、小雨にうたれ、生き生きとからだを伸ばしているかわいい生物がいる。かたつむりである。自然によく調和していて、詩人でなくても一句うかびそうである。

福井県に居住権をもち、登録されている大型のかたつむりでは、まず第一に指をおるとすれば「ツルガマイマイ」であろう。山地に大型の「クロイワマイマイ」が住んでいるが、これは白山が模式産地である。次に本県の海岸地帯には「オカノニシキマイマイ」が住んでいる。この貝も本県が模式産地で登録済みである。

さて、主題の「イセノナミマイマイ」であるが、いつ本県へ来て住みついたものかはわからない。ともかく遠慮して、こじんまりと一ヶ所にかたまって「ツルガマイマイ」をさけながら、ひっそりと住んでいる。そのためであろう、やっと昨今発見されたものである。

1969年(昭和44年)6月、朝から小雨の降っている日であった。今立町南越中学校の所在地、野岡の部落を右、左と注意しながらさがしていくと、石垣にのんびり角を出して、小雨にうたれている“かたつむり”を一匹見つけた。福井県では見かけたことのないかたつむりであった。さっそく採取してよく調べて見ると、殻の色も形も肉体も、全く「クロイワマイマイ」そっくりの小型のようにも思われる。珍らしい貝だと思い、付近をさがしたけれども、見つからなかった。一般に「クロイワマイマイ」は6cm前後であるが、この貝は5cmにもみたくない“ミニ”であった。

標本にしたけれども、どうも気になるので黒田先生の御意見を拝聴したいものと、早速現物を送り同定してもらった。先生からは

「クロイワマイマイの矮小型であろう」との御返事で、この話は一応終わったかにみえた。

こうして1ヶ年の歳月は廻ぎた。本年即ち1970年(昭和45年)6月、南越中学校の生徒諸君が、校下の“かたつむり集め”を試みた。すると驚いたことに、例の小型の貝が2個みつかった。こうなると奇形だとも、かたわだとも言うわけにはいかない。早速専門の東正雄先生のところへ、生貝のまま送って、改めて御高見拝聴ということになった。

先先生のところへは貝気違いや、自称貝天狗の諸氏が集まり、3々5々意見が出たようであるが、総合してみると「クロイワマイマイ」の小型ということに落ちついたようである。もし、小型とすれば三重県方面に分布している「チビクイロワマイマイ」というがあるので、福井県のこの貝は北方系という意味も含めて「キタノチビクイロワマイマイ」と名をつけることにした。しかし、新種として発表するとなれば、いろいろ質問も出てくることゆえ、現地について十分調査せねばならない。そして、さらにもう2〜3個も採集してより裏付けをしっかりとしておくべきである。これは当然考えられることである。

こうして、現場採集ということが計画された。しかし、生徒の採集した貝は、誰が取ったものかわからない。名前がわからなければ場所もわかる筈がない。本当にこの時は困った。ただ、幸なことに私が昨年1個採集しているので、私の採集した場所へ案内するより他に方法がない。私はそう腹に決めたものの、1個しか採集していないのである。せめて雨が降ってくれば探し求めたいと思ったが、運の悪い時は悪いもので、ことしの8月は連日の晴天である。今日は降ってくれ、明日こそと神に祈るような心地で雨の降るのを待ったけれど、とうとう雨は降らず、貝も探さず日は過ぎてしまった。

予定通り、8月25日専門の東正雄先生一行3名が訪れた。

「連日の晴天で、かたつむりが採集できるかどうかわかりませんが、採集した場所へ御案内します」

と弁解しながら、昨年の採集したところへ案内した。

「ここです。この石垣でとったのです。」

と私は石垣を指さしていった。

さすが専門家ぞろいです。前後左右の地形を見て、この貝はこの石垣の中の庭にいと、口をそろえていう。私も初め採集した時「庭にいるな!」と思ったが、あまり横着なこともできないと思って、今まで遠慮して庭の中へ入ったことはなかった。先生方は何とかして庭へ案内してくれといわれる。それではと案内を乞い庭に入った。

「何をさがすんですか。」

と尋ねられたが、

「ちょっとこの庭にかたつむりがいるのではないかと思って……。」

と返事もろくにしないで、裏庭に一行は直進した。

「ここだ、君まちがいなくいるよ。」

というが早いか

「いた。1個とったよ」

と東先生が叫んだ。つづいて他の先生も

「私もとった。」

と、全く5分とかからないのに4~5個、この晴天の打続きで、からからになった庭で採集された。

私は本当に採集できてよかったと思った。

「もう、これだけとればよいでしょう。場所もわかったし、これからあとは、私が雨の降る日に残りの貝を頂戴いたします。」

といって、一行はここを引あげた。

わざわざ遠方から、この貝を採集する目的で来られたのである。いま、その目的が達せられたのである。先生方も口をそろえて喜ばれた。私も案内役としての目的が達せられてうれしかった。

さて、この生貝をもち帰られた先生方は、鼻高々と飼育しながら、貝なかまの方々と話しあったことであろう。そして、また新種だ、いや新種には無理だと話に花が咲いたにちがいない。いろいろの意見があったということを聞いている。

飼育観察も終わったので、いよいよ結論を出すべく、かつ論文の資料もつくらねばならないので、解剖にとりかかった。現在かたつむりについては、他の貝も同じことであるが、形とともに、解剖もして、両方から考察して種をきめるのである。そこで、この貝を解剖してみてもハッと驚いた。それは今の今まで予想もしていなかったナミマイマイ系であることがわかった。どれを解剖してもクロイワマイマイ系の特徴がでてこなかったのである。ナミマイマイ系ならば、これは「イセノナミマイマイ」であろうということで、こんなにみんなをさわがせ、緊張させ、かつ喜ばせたかたつむりも、あっけない夢となり、みんなをがっかりさせて幕はおりた。

しかし、この話はまだ続く。「イセノナミマイマイ」は駿豆から近畿に分布していて、北限は美濃あたりといわれているが、これがどうして、そうって今立町で遠慮しながら住みついているのであろうか。このことは今後の課題として、今は残しておこう。

さて、こんな一幕を演じている間に、待望の雨が降ってきた。待ちに待った雨である。さっそく例の庭へ行ってみた。雨の中をはいまわっているのが10匹あまりも見つかった。さっそく採集して意気揚々と学校へ持ってくると、学校の理科の先生諸君も10匹余も採集して来ているのに驚いた。理科先生諸氏は「あそこにいるのならここにもいそうなものだ」といって、別のところを探したところ、予想通り見つかったのだという。続いて他の部落でも発見された。こうなると、今立町全域に分布しているのでないかということになり、明らかに「イセノナミマイマイ」の飛分布地として、日本の貝類学会へ報告しておこうと思って、いき貝数個を東京国立科学博物館の波部忠重博

士へ、今までの経過の概要を説明してお送りした。

ところが波部先生から、これは「イセノナミマイマイ」ではなく、「ギュリキマイマイ」であるという返事が来た。そして、両者の違いを次のように指摘された。

「殻の周縁の黒帯の太いのがギュリキで、細いのがイセノナミであり、また、ギュリキには打痕のあるのが特徴である。今立町のこの貝は線が太く、しかも打痕があるから「ギュリキマイマイ」とすべきである。」

という。そして、珍しい分布であり、改めて博物館標本として登録したことも知らせてきた。

「イセノナミマイマイ騒動」はこれで完結したとは思われない。形態的にはギュリキマイマイであり、解剖的にはイセノナミマイマイであるというまことに困った貝である。もう少し採集して、研究すればはっきりすることであろう。いまは東先生の説をとって「イセノナミマイマイ」として、本県の貝類目録に追加し登録しておくことにしましょう。

Ⅱ ハクサンマイマイ騒動

加賀の白山を中心として高い山に棲んでいる大型のかたつむり、1名「オオヒトスズマイマイ」は通称「ハクサンマイマイ」いい、その模式産地は標高1750m～2350mの間に分布している高山性のかたつむりである。

ところが、この「ハクサンマイマイ」が低地、標高240m位のところにも住んでいるといったところ、専門家の先生は驚いた。間違っているのではないか、現物を送れといわれたので、死殻ではあったがお送りして返事を待った。

すると、すぐ返事がきて、

「こんな珍しいハクサンマイマイは初めて見る。しかも間違いなくハクサンマイマイである。

どこで採れたのか、その場所を知りたいし、そこへ採集に行きたい。」

と、まあ、こんな意味の返事であった。

実はこの珍しい「ハクサンマイマイ」は1969年(昭和44年)夏休みの生徒採集品中で1個発見されたのである。私は三拝九拝して、12月ごろようやく池田二中の生徒さんからいただいたものである。本人もどこで採ったのかわからないという。多分鏡見谷であろうと見当をつけていた。

1970年(昭和45年)8月25日、「ハクサンマイマイ」の死殻を採集した場所を見たいという専門家の要望で、下池田の鏡見谷へ案内した。暑いので汗だくになりながらも、お宮の付近をくまなく探した。ブヨがいる。カもいる。オロロもいる。ハチもいる。それでも、せめて死殻でも

と思ひ一生懸命さがし求めたが、死殻の片隣さえ発見できないのには閉口した。残念ながら、ここには何もいないということで引きあげた。幸い途中で「クロイワマイマイ」の死殻ではあったが、何個か発見され、何よりだったと思っている。

今回池田で発見した「ハクサンマイマイ」は、「ツルガマイマイ」の大型といったもので、「ハクサンマイマイ」がどうして「ツルガマイマイ」と同じ形態になったのであろうか。山の上から下界へ降りてくると、下界には「ツルガマイマイ」がわがもの顔にのさばっているので、ついそのようになってしまったのであろうか。いや、その逆で「ツルガマイマイ」が平地にいても公害で、否、人害でなやまさされ、いっそ安全な地を求めて山の上へ上へと上って、ついに「ツルガマイマイ」系の「ハクサンマイマイ」になったのかも知れない。鶏が先か、卵が先かの話になるが、このことについて学説では山上から下界へ「ハクサンマイマイ」がおりて、「ツルガマイマイ」になったと説いている。山がさきにできて、平地があとにできたからであろう。

そんな話はどうでもいい。ただ珍しい「ハクサンマイマイ」であるが、いき貝を採集していないので、この話は今のところ“まぼろしのハクサンマイマイ”としておこう。ただ言えることは、いま「ハクサンマイマイ」も、他のかたつむり同様、頻死の状態にありまさに全滅しようとしているということは、貝類学者の一致した意見である。

Ⅲ コガネマイマイ騒動

敦賀から三国の海岸沿いに「オカノニシキマイマイ」が分布している。これは、ここが模式産地として登録されているから、何の遠慮もなく、雨の降る日は樹上1m以上のところに平気ではい上って、小雨ふる初夏の日本海をたのしそうに見下しているものもいる。

ところが、この海岸ぞいでかたつむりを採集してみると、3つのタイプが形態的に分けられる。一般にかたつむりには色帯といって横すじが4本入っている。1、2、3、4と付号をつけ、色帯の全くないのは0、0、0、0であらわす。もし、2と4とが色帯があって、1と3の色帯がないときは、0、2、0、4といった付号をつかう。

そこで、いま越前海岸のかたつむりを調べると、1、2、3、4模様のもと、0、2、0、4模様のもと、今1つは火燃模様で、この3つが共棲している。色帯の3が特に巾広いのがいわゆる模式標本「オカノニシキマイマイ」である。すると今1つ0、2、0、4は何であろうか。「ニシキマイマイ」というのが京都鞍馬山を模式産地としているから、あるいはそれかも知れない。火陥模様は「コガネマイマイ」であろう。

一応このような理くつが考えられ、3つの貝が共棲しているのではないかとそれぞれ現物を送って意見を求めたところ、一喝されてしまった。学のないあさましさである。全く反論などできそう

もない。

話はこうである。「ニシキマイマイ」と「コガネマイマイ」は共棲しないのが原則である。そのわけは、同一の種類からわかれたものであるから、それが同じところに分布していないのが、生物学棲分けの法則である。とまあ、こういうわけである。もし、同じに棲んでいるとすれば、それは明らかに別種のものであるという。

わかったような、わからないような話であるが、けっきょく「コガネマイマイ」の中で色帯の3が巾広いものを、特に「オカノニシキマイマイ」と名をつけたわけで、他のものは、みんな「コガネマイマイ」であるという。従って、越前海岸一帯に分布している3つのタイプは、実は全部「コガネマイマイ」の一族で、そのうち色帯3が巾広くなっている「ナミマイマイ型色採」のものを持ち「オカノニシキマイマイ」としたのである。これでどうやら、このかたつむりの名前は解決できた。

× × ×

これで大型かたつむりの騒動は全部終わったのではない。このほかにも、「カンムリマイマイ」らしいものが1個今立町で発見されている。また交雑種系で「クロイワマイマイ」と「ツルガマイマイ」のあいの子みたいなものも鯖江市や武生市に分布している。この貝については、波部先生は「クロイワマイマイの平地型」と同定していただいたが、まだ疑問が残る。生貝を採集し解剖もしてみる必要がある。

かわいい、小さなこの“かたつむり”の世界も、調べていくとその中味は深く、わからないことばかりである。それ故に研究の喜びもあるのであろう。今後県下全地域にわたって、くまなく調べることができると、どんなにおもしろい成果ができあがるか、これは今後の問題として、これからの研究にまつことにしよう。

本県の大型かたつむりについて記したのを機会に、大型蝸牛の本県目録を整理したので参考のため記すことにした。

蝸牛超科

オナジマイマイ科

1. *Aegista kobensis* (Schmacker et Böttger) コウベマイマイ(飯島)
1933年(昭8)大飯町佐分利で採集されている。近畿以西、四国、九州に分布しているもので、若狭でとれたのは珍しいが、現在その現物はなく、ただ目録に記録されているだ

けである。

2. *Aegista proba* (A. Adams) コオオベソマイマイ (平瀬)

1933年(昭8)南条郡、および敦賀、嶺南で採集されている。模式産地は京都なので本県にも分布しているが、現在はその現物がなく、ただ目録に記録されているだけである。

3. *Aegista vulgivaga* (Schmacker et Böttger) オオケマイマイ (飯島)

県下全域に分布している。

4. *Aegista omiensis* (Pilsbry) オウミケマイマイ (平瀬)

1946年(昭22)第2回改訂目録に記録されている。産地不詳であるが、分布的には滋賀福井、石川、富山に分布していると記されている。いまのところ現物がなく目録に記されているだけである。

5. *Aegista omiensis echizenensis* (Pilsbry et Hirase)

エチゼンケマイマイ (岩川)

1933年(昭8)の時の調査で嶺北一帯に分布していることがわかる。名前のとおり、越前が模式産地である。

6. *Trishoplita mesogona pilsbry* チャイロオトメマイマイ (矢倉)

(コオトメマイマイ (岩川))

県下全域に分布している。

7. *Trishoplita goodwini* (Smith) オトメマイマイ (平瀬)

県下全域に分布している。

8. *Bradybaena similaris* (Ferussac) オナジマイマイ (飯島)

県下全域主として畑等にいる。特に野菜畑で繁殖すると野菜を全滅させることがある。

9. *Fruticicola sieboldiana* (Pfeiffer) ウスカワマイマイ (飯島)

県下全域に分布している。肉体は色がやや黒いものと茶色のものが見られる。

10. *Euhadra latispira* (Pilsbry et Hirase) ハクサンマイマイ (黒田)

(オオヒトスジマイマイ) (平瀬)

白山系高地帯の貝で標高1750m~2350mに分布しているのが模式標本である。

1933年(昭8)大野郡北谷、上打波で採集されている。また1969年(昭44)今立郡池田町でツルガマイマイ系のハクサンマイマイの死殻であるが1個採集されている。

11. *Euhadra latispira tsurugensis* (Cockereil) ツルガマイマイ (黒田)

滋賀県から福井、石川にわたり分布している。模式産地は敦賀である。

県下全域に一般的に分布しているのはこの貝である。ツルガマイマイはハクサンマイマイの低地型であるといわれている。殻の色帯様式や螺層数の多いのがツルガマイマイの特徴とされている。

12. *Euhadra senckenbergiana* (Kobelt) クロイワマイマイ (飯島)

白山系高地性の貝で、わが国最大最美の貝といわれている。嶺北各地に分布し、殻の色も濃黒褐色から褐色までさまざまである。越廼村では標高50mのところで採集されている。鯖江市、武生市で数個発見した茶色のものはクロイワマイマイ平地型のものといわれている。

13. *Euhadra eoa communisiformis kanamaru* イセノナミマイマイ (金丸)

1970年(昭45)今立町で発見。ヒラマイマイ地方型で、この地方型にはイセノナミマイマイとギュリキマイマイがあり、今立町のは形態的にはギュリキマイマイに近く、解剖的にはイセノナミマイマイであるので、ここではイセノナミマイマイとして記載することにした。

14. *Euhadra sandai* (Kobelt) コガネマイマイ (黒田)

越前が模式産地で嶺北一帯に分布している。

15. *Euhadra sandai communis pilsbry* ナミマイマイ (黒田)

京都が模式産地で、殻は火焰彩模様が特徴である。嶺南より嶺北にかけ分布しているが、いまのところ福井市から以北では発見された記録がない。

16. *Euhadra sandai okanoi pilsbry et Cockerell* オカノニシキマイマイ

(黒田)

本県が模式産地である。主として嶺南、嶺北にかけての海岸地帯に分布している。

17. *Euhadra sandai kuramana Kuroda et Teramachi*

ニシキマイマイ (黒田)

京都鞍馬山が模式産地になっている。嶺南に分布している。殻には明瞭な火焰彩があるのが特徴である。嶺南にニシキマイマイとオカノニシキマイマイとが共棲しているとは考えられないので、今後の調査が必要であろう。

18. *Euhadra Callizona amaliae* (Kobelt) クチベニマイマイ (平瀬)

全県下に分布している。色帯は0、2、0、4が普通であるが、武生市内には、0、0、0、0の無帯のものが割あいによくいる。

19. *Euhadra scaevola interioris Pilsbry* ヒラヒダリマキマイマイ (岩川)

嶺北一帯に分布している。

南越中学校 校長